令和６年度第２回

札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会

会　　議　　録

日　時：２０２４年１２月２６日（木）午後３時開会
場　所：札幌市環境プラザ　環境研修室１・２

１．開　　会

○大沼会長　定刻となりましたので、ただいまから令和６年度第２回札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会を開催いたします。

本日は、年末のお忙しい中、先生方は一年中走り回っていると思いますが、師走の特に走り回っている時期にお集まりをくださり、どうもありがとうございます。

それではまず、事務局から連絡事項をお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長）　環境政策課長の飯岡です。改めまして、よろしくお願い申し上げます。

委員の皆様におかれましては、本日は、大変お忙しい中をお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。感謝申し上げます。

まず、会議の成立についてでございます。

委員会の委員の出席状況でございますが、斉藤委員から欠席のご連絡をいただいてございます。

また、今回の委員会では、本日、この会場まで来られない方はオンラインでご参加できる形を取っておりまして、坂本委員がオンラインでのご参加となっております。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のご出席は１３名ということで、委員１４名の過半数に達してございますので、推進委員会設置要綱第５条第２項の規定によりまして、本委員会が成立していることをご報告申し上げます。

続きまして、議事に先立ちまして、札幌市環境都市推進部長の西村よりご挨拶を申し上げます。

○西村環境都市推進部長　環境都市推進部長の西村でございます。

開会に当たりまして、一言、ご挨拶を申し上げます。

本日は、年の瀬の迫る忙しい中、皆様にお集まりをいただき、誠にありがとうございます。

今回は、令和６年度第２回札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会ということでお集まりいただいたわけでございますが、約２週間前にエルプラザの３階のホールでさっぽろこども環境コンテスト２０２４を実施したところです。

こういった資料を持ちながら、大沼会長と石澤副会長には審査員として参加していただいておりまして、委員の皆様にも、お休み中のお忙しい中、ご見学に来ていただきましたこと、誠にありがとうございます。

こちらのコンテストの結果につきましては、詳しい内容は後から報告があると思いますけれども、何とこのコンテストは１７回目を迎え、高校生の特別部門も踏まえると、今回は１２グループから発表がありました。

私は審査員として初めて参加したのですけれども、子どもたちが地域に根づいた環境や学校の仲間との取組を一生懸命発表したり、いろいろなことを考えて感じたことを伝えて

くれることを聞いて本当に感動しましたし、こういった取組はすごく重要だなと思いました。

また、１７回目ということですから、第１回目に参加している中学生ぐらいの人がいたら、ひょっとしたらお父さん、お母さんぐらいになってしまっているのかなという思いが一瞬よぎりまして、こういったことを続けることの大切さを改めて感じた次第です。こういった子どもの取組が大人に与える影響の大きさをすごく感じましたし、環境保全の取組について、環境教育や環境学習の重要性を改めて感じた次第です。

今後は、これまで以上に、教育委員会の皆様をはじめ、関係機関のご協力を仰ぎながらこういった分野の推進に取り組んでまいりたいと思いますので、本日は、皆様方の活発なご意見、ご指導のほどを賜りたいと思っております。

簡単ではございますが、私からの挨拶は以上です。

どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長）　連絡事項は以上でございます。

大沼会長、よろしくお願いいたします。

２．議　　事

○大沼会長　それでは、議事に入らせていただきます。

お手元の資料の表紙に次第がございますが、今日の議事は１件です。

（１）の令和６年度環境教育関係事業の実施状況及び今後の予定について、まず事務局からご説明をいただきまして、その後、委員からのご意見等をお伺いしたいと思います。

事務局から説明方、よろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長）　まず、落丁のないように配付させていただいてはございますが、念のために資料のご確認をさせていただければと存じます。

本日お配りいたしました資料ですが、次第、資料１の委員名簿、資料２の環境教育関係事業について、このほか、参考資料として、参考資料１として令和６年度環境教育へのクリック募金事業報告書、参考資料２として夏休みエコライフレポート２０２４の取組結果についてと冬休みエコライフレポート、参考資料３として校外学習用のバス貸出し利用校のご紹介、参考資料４として令和６年度環境教育・環境学習ガイド参考資料５として令和６年度環境教育・子どもワークショップの概要、参考資料６としてさっぽろこども環境コンテスト２０２４の実施報告となっています。

後ほどでも結構ですので、落丁等の不備がございましたらご合図をいただければ幸いでございます。

また、これとは別に、机の上には環境副教材と教師用の手引書を置いてございます。今日は参考ということで置かせておりいただいておりますが、以前お渡ししたものと同じでございますので、委員会終了後は、お持ち帰りせずにそのまま置いていただいても構いません。

以上でございます。不足がありましたら、途中でも構いませんので、お声かけください。

それでは、令和６年度環境教育関係事業の実施状況及び今後の予定につきましてご説明させていただきます。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　お手元の資料２の「環境教育関係事業について」に沿って説明させていただきます。

参考資料として報告書などをつけておりますので、併せてご覧いただければと思います。

本日、教育委員会の担当者が欠席であることから、環境局と教育委員会の事業を私から、環境プラザの事業については環境プラザの上杉係長から、それぞれ説明させていただきます。

では、早速、「１　はじめに」についてです。

こちらは、２０１９年に改定した札幌市環境教育・環境学習基本方針の取組の四つの柱を示したものです。

一番下に記載がありますけれども、「（１）学校などの教育機関等で行われる環境教育の推進」、「（２）の環境人材の育成」、「（３）の環境教育・環境学習の場と機会の充実」、「（４）の普及啓発のための情報の発信・広報と行動の後押し」とあり、環境教育関係事業はこれら四つの取組に基づいて実施していることから、各事業をそれぞれの取組に分類し、取組ごとに区切りまして、今年度のこれまでの実施状況と今後の予定について説明いたします。

なお、時間が限られていることもありますし、皆様は第１回の委員会に出席されており、事業の概要は既にご存じかと思いますので、事業の概要の説明は極力省略させていただき、これまでの実施状況や今後の予定を中心にお話しさせていただきますことをご了承ください。

早速、「（１）の学校などの教育機関等で行われる環境教育の推進」、「（２）の環境人材の育成」について一括でご説明させていただきます。

次の２ページをご覧ください。

まず、「ア　環境副教材・教師用手引書」についてです。

今年の動きですが、８月に動物園における気候変動教育を考える教員ワークショップが円山動物園で開催されまして、ワーキンググループの先生方にご参加をいただきました。

このワークショップの意図としましては、動物園に校外学習のために小学生が訪れることが多い状況にありますので、環境副教材を校外学習の事前学習で使用し、その後に動物園に学習を行うというような一連の流れを通して、動物園における気候変動教育、例えば、動物園でホッキョクグマを飼っていますけれども、地球温暖化の影響でホッキョクグマのすみかが減っているよなど、学びにつなげていけないかという狙いで行ったものでございます。

ここでは、動物園と気候変動教育の関わりについての重要性についてももちろん意見をいろいろいただいたところだったのですけれども、それと同時に、環境副教材が学校現場

で使われるためにはいろいろと工夫が必要なのではないかといった、そもそもの副教材の在り方についてのご意見も多くいただいたところです。

これを踏まえ、令和８年度を目標として環境副教材の電子化の検討を行うこととしまして、まず、１１月に各市立小学校教職員の方にＧｏｏｇｌｅフォームを使ったアンケートを実施したところです。

全部で２７０件以上のご回答をいただきまして、その多くが電子化に賛成の声であったことを踏まえ、今後、具体的な副教材の在り方について、来年１月に行うワーキンググループなどを通して検討していく予定となっております。

次に、「イ　環境教育へのクリック募金」についてです。

今年度は、昨年、申込みが多くて抽選になってしまったことを踏まえ、１校当たりの寄贈額の上限を引き下げて募集した結果、希望する計５７校全てに野菜の苗や気体検知管などの教材を寄贈することができました。また、後ほど説明いたします、「さっぽろこども環境コンテスト」の賞品に募金の一部を充てております。

お手元の参考資料１に寄贈を受けた学校からの活動報告が載っておりますので、併せてご覧ください。

寄附金額にまだ若干の余裕があることから、現在、２次募集を学校に対して行っておりまして、希望する学校に環境教育教材を寄贈する予定となっております。

次に、「ウ　エコライフレポート」についてです。

今年度の夏休みは、「未来の地球のためにこの夏、取り組もう！」をキャッチフレーズとして、節電や節水、地産地消などに取り組んでもらう内容としました。

取組率としては、資料をめくって４ページに表が載っておりますが、小中学校全体で８６．０％と、昨年度の夏休みの８５．５％から改善しました。これは、令和４年度からの学校への入力方法の変更の周知が一定程度進んだこともありますけれども、今年度の夏休みは特に、例えば、夏休み明けの入力の日に児童や生徒がたまたまタブレットを家に忘れてしまって入力しないままになっていたというような入力漏れを防ぐため、こちらから各学校に各児童生徒への入力の声かけをお願いしました。その結果、中学校を中心に取組率の底上げがあったことが今回改善した理由ではないかと考えられます。

今年度の冬休みについても、「未来の地球のためにこの冬、取り組もう！」をキャッチフレーズに、節電や節水、服を大切に着ることなどを取り組んでもらう内容としました。

参考資料２に冬休みのエコライフレポートの現物をつけておりますので、ご覧ください。

なお、前回の委員会で夏休み分に記載されている文言についていろいろご意見をいただいたことを踏まえ、今回はそのあたり配慮させていただきましたことを申し添えます。

次に、「エ　校外学習用バス手配」についてです。

昨年度、コロナ禍明けのバス不足によって入札が不調になってしまったという反省を踏まえ、今年度は、学校への希望調査時期を早めたとともに、バス会社に加えて新たに旅行業者を入札参加資格者とした結果、無事に落札となりました。

先日の１０月から１２月にかけて見学が行われ、ちょうど今月、全ての学校分が終了したところです。全部で２７校が利用しました。

主な見学先は５ページにあるとおりで、水道記念館、下水道科学館など、多くの施設に見学に行っていただきました。

参考資料３に利用した学校からの報告書が載っておりますので、併せてご覧いただければと思います。

来年度も確実にバスを確保できるよう、学校への希望調査は早期に行いたいと考えております。

次に、「オ　学校での出前講座の実施」についてです。

札幌市では、市民への情報提供と対話の一環として、市職員が依頼に基づいて地域に出向いて所管事業について分かりやすく説明を行う出前講座を実施しています。

最近は、ＳＤＧｓの普及や地球温暖化、気候変動への関心の高まりによってこれらの講座への依頼が増えておりまして、総合学習など、授業の一環として活用されています。

表にこれまでの実績がございますけれども、多くの学校にご利用をいただいております。

件数の割に参加人数が減っている理由として、これまでは体育館などで全クラスの児童や生徒が同じ話を聞くパターンが多かったのですけれども、最近ですと、生徒がＳＤＧｓの１７個の目標の中から学びたいテーマを選択し、選択したテーマごとに分かれて出前講座を受講するなどの少人数で授業を行う学校が増えた結果、１件当たりの受講者数が減少したことによります。

出前講座は、私たちがじかに子どもたちに伝えることができ、また、それに対する生の反応を見ることができる貴重な機会ですので、今後も引き続き続けてまいりたいと思います。

次に、６ページの「カ　環境に関する全園・全校の取組」についてです。これは教育委員会の事業ですけれども、本日、担当者がおりませんので、私が代読させていただきます。

教育委員会では、環境首都・札幌の宣言日の６月２５日を契機に、各学校でさっぽろっ子環境ウイーク期間というものを設定し、エコスクール宣言校として全ての市立の園や学校が環境に関わる取組を重点的に見詰め直し、各校の教育活動において課題探究的な学習と自主的な活動の中に位置づけながら、年間を通して札幌市の幼児、児童生徒の環境を守り育てようとする態度を育んでいます。

今年度も引き続きまして、市立の小・中学校でさっぽろっ子環境ウイークエコアクションということで、ここに写真が載ってありますけれども、児童や生徒に動画などをご覧いただき、環境に関する問題を考え、課題探究的な学習や自主的な活動において取組を実践してもらっているところです。

その下の枠で囲った部分は、今回の委員会で初めて掲載させていただいているものです。といいますのも、この委員会では、主に学校や子どもをターゲットとした事業を中心に説明させていただいているところですけれども、そもそも環境教育や環境学習は、もちろん

子どもだけでなくて大人も対象になっていますし、また、私たち環境局だけではなく、市全体において幅広く行っているものでございます。

これらの事業についても私たちの事業と同様に基本方針の四つの取組の柱に基づいて行われておりますので、皆さんにより広い視点でご議論をいただければと思い、掲載したものでございます。

お手元に環境教育・環境学習ガイドを配付させていただいていると思います。こちらの５ページまでは当課で実施している事業を中心に掲載しているのですけれども、６ページ以降をご覧いただくと、市の各部局で実施している事業を一覧にしておりまして、本体事業にはそれを集計したものを載せております。

（１）の事業については全部で１３事業が行われております。学校が対象ということで、教育委員会や環境局が中心に行っております。主な例ということで、ここにあります教育委員会のさっぽろ学校給食フードリサイクルを載せております。

次に、「（２）環境人材の育成」についてです。

７ページになります。

まず、環境プラザ関係事業について、環境プラザから説明します。

○環境プラザ（上杉係長）　私から、アからウにかけて、環境プラザの事業の部分をご説明させていただきます。

まず、環境保全アドバイザー・環境教育リーダー派遣についてですが、こちらは市民団体や町内会、学校などに対して環境に関するアドバイザーやリーダーを派遣する制度となっております。

環境保全アドバイザー派遣制度につきましては、令和６年１１月３０日現在で８人に登録をいただいております。対して環境教育リーダーの派遣制度につきましては、同じく１１月３０日現在で２８人に登録をいただいている状況です。

アドバイザー制度につきましては、地球環境、自然保護、リサイクル、ごみ問題等について、様々な環境分野の研修会や学習会等の専門家を派遣する事業で、主に講師などとして派遣をしているものになっています。

環境教育リーダーの派遣制度につきましては、主に野外での活動を通して植物、野鳥、昆虫、水生生物などの自然観察会や地球温暖化、ごみ、エコライフ分野の指導者や解説者を派遣するような事業となっております。

例年、利用が多いのは、川での自然観察や自然体験活動で、全体の半数以上の依頼が川での活動となっております。そのため、川派遣の集中する６月下旬から９月中旬の派遣依頼が多く、講師の調整がつかず、希望を受けかねるケースもあるほどです。

川での活動につきましては、安全管理面で配置人数が多くなることから、１回当たりの派遣人数が増えることで、リーダーの負担感が高く、ニーズがある一方で、実施時期についても限定されるため、派遣数に上限があることが実態となっていますが、ニーズに対応できるよう、現状をリーダーの皆様と共有しながら、より多くの利用者の環境活動の希望

に寄り添った支援を継続していきたいと考えています。

派遣実績は下表のとおりになっておりますが、令和６年の実績としましては、アドバイザーの派遣件数は、昨年は件数が多かったのですが、それ以外の年と比べると平年どおりの推移となっております。

環境教育リーダーの派遣件数としましては、令和４年度から比べると減少傾向にあるように見られますが、こちらにつきましては、先ほどもお伝えしたとおり川活動が中心となっており、昨年度が猛暑で野外での活動に関してかなり懸念されている小学校や団体が多く、それで件数が減ったのではないかと推測しております。

アについては以上です。

続いて、８ページの「イ　こどもエコクラブ」についてです。

環境プラザは、公益財団法人日本環境協会が実施するこどもエコクラブの札幌市内における事務局を担っており、こどもエコクラブへの登録団体及びこれから環境に関する活動を始めようとする団体への情報提供を行っています。

また、年に一度開催しているこどもエコクラブ交流会を令和６年１２月２１日土曜日に円山動物園で開催しております。市内で活動するエコクラブ３団体とともに、円山動物園協力の下、バックヤードでの見学とクラブ間の交流を行いました。

また、環境プラザが主催するさっぽろあそエコ団は、夏に川で生き物を採集し、秋には円山での自然観察を行い、植物が紅葉する仕組みについて学びました。これからになりますけれども、冬には札幌市青少年山の家での体験活動を予定しています。

続いて、「ウ　指導者向け研修」になります。

こちらにつきましては、令和６年度分については北海道立総合研究機構の森林研究本部と連携しまして、開発中の間伐材を使用した昆虫標本や植物標本のキットの環境教育への導入の初期段階として指導者向けの講習会を実施予定としています。実施予定と書いていますが、来年の１月８日にこちらの環境研修室で実施予定となっております。

以上になります。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　続きまして、「エ　環境教育・子どもワークショップ」について、私から説明させていただきます。

今年度はこれからの実施となりますが、令和７年２月２２日と３月８日に各日５か所ずつ、計１０か所の児童会館に通う小学生を対象として開催する予定です。

ワークショップは、昨年度と同様、本部のメインファシリテーターから児童会館の各会場にオンラインでプログラムを配信し、各会場では、現地のファシリテーターの誘導により、子どもたちが対面によりコミュニケーションを取るとともに、オンラインで各会場との意見交換をするなど、オンラインと対面のミックスで行う予定です。

あわせて、環境教育に興味があり、ワークショップなどのスキルを身につけたい高校生、大学生などのユース世代の人材育成のため、希望する若者を対象にファシリテーターの養成研修会を実施し、このワークショップの運営スタッフの一員として活動してもらう予定

です。

お手元の参考資料５に今年度の実施概要が載っていますので、ご覧いただければと思います。

次に、「オ　教員に向けた研修」は教育委員会の事業なので、私から読み上げます。

教育委員会では、札幌市の学校教育に携わる教職員の資質向上と専門的な力量を高めることを目的に、ＳＤＧｓの基礎や環境教育に役立つ施設活用など、環境教育に関する専門的研修を実施し、昨年度は延べ１５０人以上の教員が受講いたしました。

今年度は、昨年度同様、ＳＤＧｓの基礎や環境教育に役立つ施設の活用円山動物園①体験編に加え、環境教育へ役立つ施設の活用円山動物園②授業づくり編を新設して、施設における体験を授業づくりにつなげる研修を実施し、延べ１３０人以上の教員が受講いたしました。

最後に、本市における実施状況についてです。

専門家の派遣や人材育成という性質もあるのでしょうけれども、実施事業は環境局の４事業と限られております。例として、さっぽろ気候変動タウンミーティングという主に大人を対象としたワークショップを載せております。

なお、ガイドの６ページでは３事業しか載っていないのですけれども、これはイとウの環境プラザの事業については載っていないということと、エの環境教育・子どもワークショップについては単なる掲載漏れになっておりまして、次回のガイド改定の際には反映させたいと思います。オの教員に向けた研修については、学校関係ということで、（１）と重複しているため、ガイドでは（１）に入っていることによるものです。

これで（１）と（２）についての説明は以上です。

議事をよろしくお願いいたします。

○大沼会長　（１）から（４）まであるうちの最初の半分の（１）と（２）についてご説明いただきました。

どこからでも結構ですので、ご意見やご質問等をいただければと思います。

○欠委員　私からは、質問と意見を合わせて２点あります。

まず１点目ですが、エコライフレポートに関わってです。

この質問は、小学校の関連の方で詳しい方がいらっしゃったら併せて教えてほしいなと思います。

私は、冬休みの取組はもちろん基本的にいいなと思っていますし、リサイクル関係といいますか、ごみの分別などは非常に大事だと考えております。

中学生用の６番のところでごみはきちんと分けてリサイクルとありますし、燃やすごみを減らせば、ごみを燃やすときに使う石油を減らすことができますということも入っているのですが、小学生のうちからこのあたりの意識はある程度持たせたいですし、家庭の方と一緒になっての取組でもあると思いますので、小学生のうちからの基礎的な姿勢という意味では、４年生から６年生用のところにもごみの分別なりリサイクルということを入れ

たほうがいいと思いました。

ただ、小学校関連の方にお聞きしたいのですが、４年生でリサイクル、あるいは、ごみの分別への意識や言葉の意味などはどうなのでしょうか。このあたりをお聞きした上で、４年生から６年生用でもリサイクルのことに触れたらいいのではないかという意見を述べさせていただきます。

２点目は、校外学習用のバス手配のところについてです。

４ページの最後のほうにアンダーラインが引いてありまして、応募があった６０校中、抽選で選ばれたのは２７校ということです。せっかく環境関連で頑張ろうとしているところなので、より多くの学校に参加してほしい、手配してあげたいという気持ちがありますので、お金の関連もあるので大変難しいところですが、何らかの工夫でもう少し抽せんで選ばれる学校を増やすことは可能でしょうか。

○大沼会長　一つ目のご意見の小学校の高学年用にもということについて、まず事務局から背景などを簡単にご説明いただき、その後、学校の先生からご意見、ご示唆をいただければと思います。

まず、事務局からお願いします。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　４年生から６年生用の６番を雪かきなどで体を温めるというふうにしたのは、小学生ということで、子どもたちが取り組みやすい項目を入れたからです。中学生になると、さすがに雪遊びをすることもあまりないということで、６番をリサイクルにさせていただいたという背景がございます。

ただ、今、もしかしたら小学校高学年のうちからリサイクルに取り組むことも大事なのではないかというご意見をいただきましたので、小学生の方にご理解をいただけるということであれば、次回以降のエコライフレポートに反映させたいと思っております。

○大沼会長　では、学校の先生側から、能登委員、お願いできますか。

○能登委員　「地球にやさしくしてる？」を見ていただいたら分かると思うのですけれども、４年生は社会科でごみの学習をしているのです。その中でリサイクルなどの勉強もしっかりとしております。ですので、可能であれば４年生から６年生用の中に入れていただいてもいいと感じます。

ただ、雪遊びもすごく大事かなと思いますし、外で体を動かして温まるということも非常に大事かと思いますので、どちらかということではないのですけれども、リサイクルについては子どもたちも非常にしっかりと取り組んでいるところかなと思います。

○大沼会長　別に６番の外遊びでなくてもいいのですよね。そのあたりのバランスをどう取るかだと思います。ただ、６個ぐらいが相場で、多くても困るということだと理解しているので、その辺のバランスをどう考えたらいいかなということかと理解しました。

この件について、ほかの委員から何かありますでしょうか。

○有坂委員　今のエコライフレポートのお話ですが、私は、逆に外に行くのが少な過ぎると思ってみていました。中学校になると全部家の中でやるものになってしまっているので、

これはどういう意図なのかが分からなくなってしまったというか、エコライフとは何を求めているのかなと疑問に思ってしまいました。

温暖化対策をしようという話なのでしょうが、エコライフは、気候変動だけのことではなく、生き物に関心を持とうという面もあるのではないかなと思うと、屋外での取り組みが少ないと思ってしまったのです。

どれが何とかということではないのですけれども、リサイクルが足りないと思われるのももちろんそうですし、外に誘導するような何かがないなとも思います。もう少し多様な環境について関心を持つような中身になるとよいのかなと感じました。

○大沼会長　確かに、外に出るというのは、子どものうちは環境に関心を持つためにも大事だし、また、子どもの成長や健康などにとっても、いろいろな面があるということだと思います。

○先名委員　親の視点でコメントをさせていただきます。

小中で同じように冬休み、夏休みでうちの子どもたちがこちらを学校に提出していたのですけれども、だんだんとなぜか提出しなければいけないものみたいな感覚で、しかも、こちらの表紙の部分に書いてあるとおり、地球の未来のためにという言葉がなくなっていて、やるやらない、もしくは、やったやらなかったという形のチェックだけして出しているような空気を親としては感じておりました。

クラスメイトの話では、テレビを見たりゲームをする時間を減らすという項目にはつけない子が多いということでした。では、なぜつけないのか、つけなかったらどうなるのか、つけられるようにするためにはどうしたらいいのだろうかというところまで話を落とし込めたらいいのですけれども、それが今はできない状態で、ただこれが配られて、これを提出した結果の数字になっていっているので、そうすると、何のために時間をかけていっぱい話をしてお金もかけてつくっているのかとなってしまいそうなので、いま一度、てこ入れが必要になってきたかなと感じておりました。

○大沼会長　高学年になるほど、親も子どももマンネリ化するということですね。正直に告白すると、うちの子のときもそうでした。難しいなと思います。

学校の先生側から、いいご提案、ないしは、悩みでもいいのですけれども、何かございますでしょうか。

三浦（英）委員、いかがですか。

○三浦（英）委員　エコライフレポートについて、今、先名委員がおっしゃったようなこともやはりあるかなと思います。

確かに、この６個、７個から選ぶだけになってしまう心配もあります。自分も委員を３年間やってきていますが、設問についてはかなり検討されてきていると感じます。以前は確か宅配便を時間内で取ろうとか、そういう設問もありました。それも子どもにとっては環境を考えることにつながるのかどうかという意見も言わせていただいたと思うのですけれども、親と一緒に行動することを意識した設定であると聞き、なるほどなと私も思いま

した。

学校でもやりますけれども、家庭で親子でコミュニケーションをとり一緒に取り組むことにつながっていくとよいと思いました。エコライフレポートの取組を通して、設問を回答する時だけでなく、持続可能で長く続けることや一緒に協働して取り組むことの大切さを理解できればよいと思います。

○大沼会長　１枚の表裏という短い紙面だけれども、家庭に持ち帰って家庭でのコミュニケーションのきっかけになればいいなということ、また、ごみや自然も含め、こちらの教材があるし、学校でもそういったお勉強を子どもたちはしているので、うまくそれとリンクさせられる工夫を何かまた考えていけたらなということかと理解いたしました。

それから、欠委員からもう一つご質問があって、校外学習のバスの台数についてだったのですけれども、事務局からお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　こちらは第１回の推進委員会でもお話をさせていただいたのですけれども、昨今、バス業界の運転手不足などといった問題がございまして、バスを借りる金額がどんどん高くなっている状態です。なおかつ、バスの人員が不足しているということで、バスの取り合いになってしまって、なかなかバスが確保できない状態になっております。

このために、私たちは、令和５年度に入札不調になって各学校にご迷惑をおかけしたという反省がございまして、令和６年度に旅行代理店などを入札参加資格者に加えることで確実にバスを確保できるような体制づくりを行ったところでございます。

それと引換えでもないのでしょうけれども、旅行代理店を通すということにより、バス会社に直接手配するときよりは経費がかかってしまい、その結果、利用できる学校が減ってしまっているのではないかと思います。ただ、バス会社に直接お願いして安くしようとすると、今度は逆に入札が不調になってしまうだとか、そういったジレンマも抱えているところでございます。

我々としては、令和５年度みたいな事態にならないように、利用数は少なくなってしまったとしても、確実に利用できるような体制づくりということで、今年度からこういったかたちを採っているというところでございまして、我々としても厳しい状態ではあるのですけれども、一校でも多く利用できるようにしているところです。

○山本委員　私もここで関連して質問とお願いをしようと思っていたので、発言させていただきます。

地方の小学校で、来年の修学旅行は小規模校は乗り合いで行くという話が進んでいるということをよく聞きます。そのような中でも、外に行く機会をつくりたいと思われている学校は多くいらっしゃいます。

私の娘が通う小学校の先生からは、公共交通で乗り継いで行くために新しく費用を集めるということと、その費用は外部から出るということだと、後者では学校としても動きやすさが違うと聞きます。

バス確保の難しさが、ここまでの状態になってきているので、公共交通で動くときもここまで補助が出ますという形も併せて次年度以降は検討していただけるとありがたいと感じています、当選か落選かではない中間の選択肢ということです。外に出る機会をどう確保していくか、いかにそのハードルを下げるかということを考えると、バスだけではない手段も検討していただきたいというお願いです。

○大沼会長　事務局、バスだけではなく公共交通もという可能性はあるのでしょうか。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　もし公共交通利用に補助という形になると、バス手配の委託ではなく補助金を交付するにかたちになるのではないかなと思うのです。そうなってくると、今の制度から大きく設計を変えてしまわないといけませんので、その辺りが実現できるかというのは今時点では何とも言い難いところでございます。

ただ、状況については理解させていただきました。

○大沼会長　いろいろ難しいことが多そうですね。

では、ほかの箇所についてはいかがでしょうか。特に副教材の件は、前回もいろいろなご議論をいただいたところですが、いかがでしょうか。特に電子化については賛同していただく委員がかなり多かったと思います。

○山本委員　質問なのですけれども、電子化で進めたときに考えられる運営側のメリットとデメリットは何か教えてください。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　メリットは、単純に紙資源の節約といったことが一つ、また、今、紙冊子だと学校で２年間保管しておかなければいけないということなので、例えば、学校で２年間保管していたつもりがなくなってしまった、生徒が増えたので追加で送ってほしいというようなことへの対応が必要なくなると思います。

今回、先生方からいただいた意見を抜粋して説明させていただくと、「学校側の立場としては、タブレットにリンクを張れば調べ学習にも役立つし、子どもたちにも自由に見てもらえるので賛成」、「資源節約の観点から賛成」、また、「電子化されれば２年間紙の冊子を保管する必要がなくなるので、学校としては非常に助かる」という意見がありました。

逆に、懸念の意見としては、「目につかなくなって利用率の低下につながるのではないか」、「特に低学年で端末を利用できない子どもの学習の遅れが懸念される」という意見がありました。

賛否はいろいろありますので、この辺につきましては、今後、ワーキンググループの中で議論をしていただき、電子化に賛成という意見が圧倒的に多かったものですから、電子化に進んでいくのでしょうけれども、それに伴う我々の更新の手間がどんなものなのかなどの課題もあると思いますので、それを踏まえながら今後検討していきたいなと思っております。

○大沼会長　ワーキンググループに関わっていらっしゃる先生はこちらにいらっしゃらないでしたか。

○三浦（貴）委員　昨年度までワーキンググループに関わっておりました。

電子化の話題になると、今お話しされたデメリットのところで、低学年は使いづらいという意見があったという話を聞いて、逆に、２年生の生活科の学習でクロームブックで調べたり見たりしようとしたときに、入力する力がそんなにないから遅いのです。

でも、ブックマークとかでこういうものがあると、タッチパネルなものですから、選んでやるだけなので、低学年でも平仮名を読んで選んでそのページが出てくるというふうになると、使うことにはそれほど抵抗はないと思います。

紙媒体が視界に入らないから利用頻度が下がるかというと、そういうことではなく、視界にあったとしても、担任の先生がどれだけそれを意識づけさせられるかというところだと思います。視界に入っても、学級の中でそれを使う意識がなければ使われることがなくなってしまうので、そこは、子どもの意識というよりも、それぞれの学級の担任の意識の問題もあるので、職場の意識改革も必要になってくると思いました。

○大沼会長　先生側の意識もあるのですね。

ちなみに、教師用手引も一緒に電子化されるという理解でいいですか。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　そうです。紙資源の節約の観点もありまして、教師用手引書も併せて電子化する予定です。どういう形でやるかは今後の検討になります。

○大沼会長　そうすると、先生がこういうのがあるよということに気づかないと、本当に使えなくなってしまう可能性はあるので、そこは気をつける必要があるという感じですか。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　そのとおりです。

○大沼会長　ほかの点について、何かございますでしょうか。

○松田委員　今の副教材の件については、教員の方々が手に取るチャンスが今まではあったのでしょうけれども、電子化になると手に取る機会がなかなかなくなって、存在が忘れ去られてしまうということもあると思ったのですけれども、そのために、年度当初にぺら一枚でもいいので、ＱＲコードがついたものが送られてくるとか、意識がつくような手続なり何なりをするといいのかなと今思いました。

ここからはほかの質問で、３点あります。

７ページの（２）の環境人材の育成のアの環境保全アドバイザー・環境教育リーダーの派遣のところについてです。

冒頭に「市民団体、町内会、学校などに対して」とありますが、内訳がどうなっているのかを知りたいです。学校の中でも、小なのか、中なのか、もしくは、それ以外の学校なのか、詳細なデータがあると今後の戦略も立てやすいという気がしたのです。それから、それ以外の市民団体や町内会は多分社会教育関係だと思うので、社教でどれぐらいなのか、さらに、もしかしたら企業内研修や組織内研修などもあるのかもしれないので、一緒にするよりは別々に表していただけると見えてくるものがあるという気がしましたが、そういうものが今あるのなら教えていただきたいですし、なければないで検討していただければありがたいなと思います。

２点目も同じくアなのですけれども、アドバイザーの方が今現在８人と２８人ということですが、この方々の稼働率はどれぐらいなのかが知りたいです。

私もほかの機関のアドバイザーをしていますけれども、稼働がゼロという年度もあるアドバイザーの方もおられると聞いていますので、どれぐらいの稼働率があり、もしくは、希望される方がこの人にお願いしたいという希望を取りながらやれているのかなど、お話を聞かせていただけるといいと思いました。

夏場の６月下旬から９月の依頼が多くて希望を受けかねるとあったので、いたずらに人数を増やせばいいという問題でもないと思ったので、誰がどのようにというところのお話を聞かせていただけるとありがたいです。

３点目は、８ページのエの環境教育・子どもワークショップについてです。

９ページの２行目に「高校生・大学生などの若い世代の人材育成にも同時に取り組む」とありますが、どのように高校生や大学生に対して情報提供されているのかなと思いました。

私も大学なので、特にいろいろなつながりを持たせていただいている方が多く、そこから情報が来るので、学生などに提供しているのですけれども、それ以外のところではどうなのかというところです。

よく学生を派遣するのですけれども、結局、同じ大学から来ている子が多いということがあって、多様なことを考えると、情報の伝え方、届け方は今後考えていくといいのではないかという気がしました。

特に、ファシリテーター的なものは、教員養成系もしくは教職課程系のところだとかなり親和性が高いと思ったので、そこへどうやってアクセスするのかは戦略的にありではないかという気がしたので、ご質問させていただきます。

○大沼会長　事務局から、まとめてお答えいただいてよろしいでしょうか。

○環境プラザ（上杉係長）　まず、環境プラザからお答えさせていただきます。

環境アドバイザーとリーダーの派遣に関してですけれども、内訳は、今のところ一覧がございませんが、アドバイザーにつきましてはより専門性の高い内容になっていますので、学校の中では小中というよりは高校が多く、直近でいうと藻岩高校から要望が来ています。また、市民団体についても、環境に関する活動をされている組織の中での研修、講習会に講師を派遣しているものになっております。

一覧は、準備ができれば、今後、盛り込ませていただければと思っております。

稼働率につきましては、制度的なものというより、先に団体からこの日にやりたいと希望が来るもので、その日の活動内容が体験活動によるものなのか、野外体験などの広い分野になるのか、分野ごとに希望を出してきて、その日程に対して該当する講師に対して都合のつく方がいないか、こちらから調査をかけます。そこで都合のつく講師を派遣していくので、こちらがいついつやりますというより、先に日程と内容が決まったものがこちらに降ってくるので、その辺の調整が難しく、偏りが出てしまうのは仕方がないと考えてお

ります。

ですから、伸びしろとして考えているのは、今、こどもエコクラブの事務局活動をしておりますので、そちらをより推進していくことで、様々な活動の展開を伝えていく中で、こどもエコクラブに参加しているクラブ自体が講師派遣を使っていくことにつなげていくと稼働が増えて満遍なくいくのではないかと考えています。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　続きまして、ワークショップのユースの人材育成の質問に対して回答させていただきます。

現状の周知方法としましては、各区の区民センターや環境プラザ、各市立高校への周知、また、若者の活動のサポートを行っている若者支援総合センターにもお願いをして周知してもらっているところです。

例年のユースの集まり具合なのですけれども、一番多いのが高校生でございまして、市立高校の学生で毎年参加してくれている子もいますし、先輩の紹介によって参加してくれている人が多い現状になっております。

もちろん、より広く周知が必要と考えていますので、いただいたご意見を参考にさせていただきたいと思っております。

○大沼会長　松田委員のご意見の中に、教員養成系などのチャンネルともうまくつなぐといいのではないかというご意見があったと思いますので、その辺をご検討いただけると広がりがより出ると思います。

（１）と（２）でほかに何かございますか。

○熊木委員　９ページのオの研修について質問です。

専門的研修で、実際に体験された先生が授業に生かすのはリアリティーも出て非常にいいことだなと思います。教材が動物園ということなのですが、どんな体験をされて、それがどういうふうに授業に生かされるのかが知りたいです。

また、２年連続で動物園になっていると思うのですけれども、先生方からこんな施設でこんなことをというようなお声があるのであれば、私は北海道ガスなのですけれども、いろいろなご協力もできるのかなと思いました。

○大沼会長　二つご質問があったと思いますけれども、事務局からお答えいただけますでしょうか。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　申し訳ございません。教育委員会の事業のため、私からは答えかねますので、教育委員会の担当に伝えた上で回答をさせていただきたいと思います。

○大沼会長　学校の先生から、聞き及んでいることがあれば教えていただきたいです。

○三浦（英）委員　自分の周りにはいないのですけれども、自分も理科なので、以前やったことで言うと、中学校２年生で動物などの授業をするので、分類だとかを事前に勉強していて、理科の授業でやるとか、または、校外学習などの時間でやるということはやったことがあるのです。

それは、教科書や資料集で見るよりも実際に動物を目で見られる、更に、手や足の動き方等がリアルに見られるのがやっぱりいいのです。体のつくりだとかを見ながら、勉強よりもリアリティーのある学びになるので、これは本当にいいと思っております。

○大沼会長　いろいろなニーズはありそうだということかと理解いたしました。

ちょっと脱線してしまうのですけれども、今回、市で環境局以外の取組もご紹介いただいていて、９ページの真ん中のボックス囲みのところで４事業とあるのですけれども、実は、民間企業も様々なところに派遣したり、勉強会を手伝っていただいたり、学校に直接民間の方が出前授業や講師をしているということを聞くことが増えてきているのですけれども、そのあたりの実態はどうなのでしょうか。

○熊木委員　私ども北海道ガスでは、児童向けの出前授業をしています。ＬＮＧで花びらが凍るやつなど、出前授業は年間で相当やっています。ニーズはいただいています。

○大沼会長　結構ニーズがあるということですね。

○熊木委員　おかげさまでございます。

○大沼会長　学校の先生としては、割と民間の方をお招きすることは多いですか。

○能登委員　学校でも、勉強に合わせて専門家の方に来ていただくことが多く、民間の方に来ていただくこともありますけれども、民間というよりは役所の関係の方にお願いすることのほうが多いと思います。

○大沼会長　公的機関のほうがお願いしやすいということですね。

ほかにございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○大沼会長　それでは、事務局より（３）と（４）のご説明をお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　それでは、「（３）環境教育・環境学習の場と機会の充実」について説明いたします。

最初のアとイについては、環境プラザから説明させていただきます。

○環境プラザ（上杉係長）　説明させていただきます。

「ア　学習支援等」についてです。

環境プラザ見学者への展示解説や展示物を利用した見学者向けの環境教育プログラムの実施、教育教材の貸出し、利用者の要望に合わせた学習支援を行っております。

見学ツアーに参加してくださっている方々に自由に選択していただけるのですけれども、アクティビティーをプログラムとして入れて実施することができまして、令和５年度末に新しいアクティビティーの開発を手がけており、脱炭素に関するアクティビティーの導入も行っています。

まだプログラムとして実施するところまでは至っていないのですけれども、見学ツアーのパンフレット更新を今年度行う予定でありまして、そこに盛り込んで次年度の見学受入れ数の増加を目指した広報活動を予定しています。

続いて、「イ　各種講座等の実施」についてですが、今年度は、北海道大学の北大森林

研究会の学生と連携しまして、林業やその過程で製造される廃材を利用した木工ワークショップを開催いたしました。学生たちの林業について知り、森に興味を持ってほしいといった思いを実現する講座を開催しております。

また、昨年度から実施しているのですけれども、北海道環境カウンセラー協会と共催して湿原の保全に関するミズゴケを活用した内容の講座を実施するなど、様々な団体と連携して各種講座を実施しております。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　次に、「ウ　さっぽろこども環境コンテスト」についてです。

これは、小・中学生が日頃環境のために取り組んでいる活動を発表するコンテストとして平成２０年から実施しており、今回は１７回目の実施でした。

今回は、昨年度同様、エルプラザ公共４施設ホールにおいて、会場でのステージ発表を基本として、当日の児童生徒の引率が難しい学校などについては発表の様子を事前収録して当日会場で公開する方法で実施しました。

コンテストの開催周知を４月から開始したことや出場団体の募集期間を長めに確保したことなどにより、出場団体数は、高校生の特別発表を含め、昨年の９団体から１２団体へと大幅な増につながりました。

ちなみに、この１２団体というのは、歴代のコンテストの中でも２位タイの多さとなっております。

参考資料６で、各出場団体名と発表の内容について、簡単に紹介させていただいておりますので、ご覧いただければと思います。

参考資料の裏面について補足です。真ん中より下のほうに審査項目がＡからＦまでありますが、新たに「Ｆ　協力・協働」を入れております。これは、令和５年度第２回のこの委員会において、協力・協働を追加してはどうかというご意見があったことを踏まえ、新たに追加したものでございます。

また、一番下右側の写真なのですけれども、各出場団体の環境活動の紹介ポスターのそばに付箋を貼るスペースを設け、来場者やほかの団体の人に発表の感想やその団体に対する応援メッセージを書いて貼ってもらう試みを行いました。これも、前回の第１回目の委員会で、団体同士で交流できないかというご意見があったことを踏まえ、新たに実施したものでございます。

来年度のコンテストにつきましては、翌年度の授業・事業内容を前年度のうちから計画している学校や団体が多いことに配慮し、より早くから開催を周知することで来年度の計画の中にコンテストを加えてもらえればいいと考えております。

なお、今年度、最優秀賞を受賞した学校と団体については、来年の１月２２日に実施する「さっぽろこども環境コンテスト２０２４市長報告会」において秋元市長の前で発表してもらう予定で、市長報告会は令和元年度の実施以来５年ぶりとなります。こちらについては、来年度の推進委員会で結果を報告させていただきたいと思います。

１１ページの本市での（３）の実施状況ですが、各種イベントや講座、環境美化活動など、分野が非常に多岐にわたっているということで、１１２事業と一番多く、たくさんの部局で実施しているところでございます。

例として、円山動物園教育推進事業は、冒頭の環境副教材のところでワークショップの話をしましたけれども、その一環で行われたものです。また、公園などにおける自然観察会、各地域で行われている美化活動への支援を記載しているところでございます。

次に、「（４）普及啓発のための情報の発信・広報と行動の後押し」について説明いたします。

最初に、アとイについては環境プラザからお願いいたします。

○環境プラザ（上杉係長）　「ア　環境プラザホームページ等」についてですが、こちらは講師派遣や貸出し教材、事業などについてホームページで情報提供を行っているほか、フェイスブック、インスタグラム等への投稿で各種事業の報告から実施前の広報まで情報発信を行っています。アクセス件数については表のとおりです。

続きまして、「イ　環境中間支援会議・北海道の取組」についてです。

こちらにつきましては、行政や地域など様々な組織との間に立って情報提供、アドバイス、コーディネート等のサポートを行う会議となっております。環境省の北海道環境パートナーシップスオフィス、通称ＥＰＯ北海道と北海道環境財団、札幌市環境プラザ等で連携して北海道内における様々な環境活動の支援を行っております。

この会議には、環境省の北海道地方環境事務所や北海道、札幌市の職員もオブザーバーとして定期的に参加しております。

なお、ホームページの「環境ナビ☆北海道」において、環境に関するイベント情報等を配信しています。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　次に、「ウ　環境広場さっぽろ２０２４」についてです。昨年度は、Ｇ７札幌 気候・エネルギー・環境大臣会合実行委員会主催事業の「環境広場ほっかいどう２０２３」として開催したところですが、今年度は今までどおり環境局主催により、令和６年８月２４日、２５日の日程で大和ハウスプレミストドームで開催いたしました。

期間中の来場者は１万８，１１１人で、１８７の企業や団体に出展していただきました。

下のほうにこれまでの来場者と出展者の推移の表がありますので、併せてご参照ください。

その下の「エ　環境教育・環境学習ガイドの発行」につきましては、先ほどから皆さんにご覧いただいておりますし、資料に記載のとおりですので、説明は省かせていただきます。

最後に、本市の（４）の実施状況ですが、情報発信や広報活動が中心で、全部で８事業ございます。

例として挙げた広報さっぽろでは、環境に関する紹介を定期的に行っております。先日

発行されたばかりの１月号では、「しっとくさっぽろ」という漫画のコーナーでごみの分別方法の紹介をしておりますし、その前の１２月号の特集記事でも、「守りたい！地球の未来」と題して自然環境保護に携わる方の紹介をしております。ゼロカーボン関係でいきますと、今年９月号の特集記事の「地球を守り、豊かな社会へ」において、地球温暖化による影響、再生可能エネルギーやＧＸの取組の紹介などを行ったところでございます。

説明は以上でございます。よろしくお願いいたします。

○大沼会長　ただいまの説明につきまして、ご質問やご意見、ご提案等がございましたらお願いいたします。

○欠委員　２点お願いいたします。

１点目は、環境コンテストに関わっての参考資料一式の最後のところになるのですけれども、大変いい取組で、盛り上がったというお話もお聞きしております。また、審査項目に学び合う、あるいは、協力し合うという項目を加えたというのは大変よろしいと考えます。

その前のＥの発表のところですが、分かりやすくまとめられ、伝えられているというところは、発表の機会でありますので、周囲の子どもや大人への広がり、活動の意義の理解と同じように満点は５点に上げてもいいと思います。

もう一点は、これも細かい点で申し訳ないのですが、最後の環境教育・環境学習ガイドについてです。

先ほど、展示の会場で２冊あったのが５年度版だったので、ぜひ、新しい６年度版を置いておいたらということを申し上げさせていただきました。

これは基本方針に基づくということから、基本方針で使っている言葉は変更できないのであれば仕方ないと思うのですけれども、このガイドの１ページ目の左下の対象とする分野の②に低炭素社会の実現に関することとあるのですが、今、報道関係もそうですし、先ほどもアクティビティーということがありましたが、脱炭素となっておりますので、この部分については「脱炭素社会の実現に関すること」に直したほうがよろしいのではないかと思ったのです。

もしそうであるなと判断されたら、６年度版はもうつくってしまっていますが、訂正のシールを貼っていたほうが、新しいものなのだ、今の注目のものなのだというふうに目立つ意味でも、脱炭素社会という言葉をここにはっきり示したほうがいいかな、６年度版については訂正のシールを貼ったほうがいいかなと思いました。

個人的なアドバイスです。

○大沼会長　２点のご提案をいただきましたが、事務局からそれぞれお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　まず、環境コンテストの審査項目についてです。

これは、今お話しいただいたとおり、ＡとＢを５点にしているのは、コンテストの趣旨といいますか、継続して活動をして子どもたちの発表を通して大人たちや周りの人たちに活動を広げてもらうということが大事なところだからです。Ｂの理解と認識も同じく、子

どもたちがきちんと目的意識や活動の意義をよく理解してやっているかがこの中でも重要ということで５点にしているところでございます。

得点の配分につきましては、コンテストにおける重要性などを鑑みて配点しているところでございますので、来年の配点につきましては検討をさせていただきたいと思っております。

次に、２点目のガイドの１ページ目についてです。

これは、まさに今お話があったとおり、基本方針で低炭素社会の実現に関することと書いてあることに基づき、ガイドではこのとおりに記載しているものです。基本方針に沿って書いているということもあり、この部分だけ急に直すというのはどうかというところがございます。

この基本方針は平成３１年３月に改定され、１０年をめどに見直しを行うことになっておりますので、次の見直しの期間としてはおおむね令和１０年度ぐらいになるのかなと思っているところです。

ですから、当然、次の基本方針の改定の際には、この辺の文言は変わってくるのではないかなと思いますけれども、基本方針でこのように書いているものを勝手に別の文言に置き換えることはできないので、こういう記載をさせていただいているということを何とぞご理解いただければと思います。

○大沼会長　さっぽろこども環境コンテストについて、私もかれこれ３年か４年ぐらい審査させていただいているのですけれども、発表のうまさというのは、親や大人がどのぐらいてこ入れしたかにかなり依存するのです。そのことと子どもが自分たちがしゃべっていることを分かっているのかなというのが微妙にずれているのです。見ているとそれが分かってしまうのです。

また、最近は、動画や音響を上手に入れてくるのです。それも確かに大事な要素であることは間違いないのですけれども、それを５点にしてしまうと、技に走り過ぎてしまってもどうかなという個人的な意見はあります。勝手な意見を言わせていただいて、すみません。

それから、２点目の件は大事だと思うのですけれども、環境教育・環境学習ガイドの１ページを開いたところの下のほうにあるのは、左側が対象とする分野で右側がどういう取組かというふうに分けていて、５ページ、６ページ以降の一覧表はあくまでも取組一覧なのです。

ですから、その分野はそれぞれ全部何かが当てはまるので、もしできるならば、例えば、６ページ以降の取組一覧の表の右に列を一個増やし、この取組は対象とする分野の①から④のどれに該当しますみたいに、多分、一つだけではないので、これは②に該当しますとか、これは②と③に該当しますというのを記載していただくと欠委員のご指摘にも対応できるし、何をやっているのかということも分かりやすくなると思いましたが、いかがでしょうか。

○欠委員　まず、発表のほうについてですが、今言っていただいたことが何となく分かるのです。技術に走りたくないというのは、私は高校のときに合唱をやっていたのですが、それ以降も、合唱を聞いたりする中では、技術ではない、やっぱり魂がこもっているか、表現が大事なので、そう見ると、発表の技術を見ていくのは確かにそうだなと感じました。

２点目については、令和１０年度まで、６年度、７年度、８年度、９年度も開いたら基本理念があり、対象とする分野で低炭素社会の実現に関することとあるのは、この後もぱっと見ると引っかかるかなというのが正直な気持ちです。

今のお話だと、７年度版、８年度、９年度版もできたときは同じで、印刷の関係で令和１０年度版で変わってくるのかなという気がします。１０年度版まで一緒なのかもしれません。個人的には引っかかるのですが、具体的な方針はおまかせします。

○事務局（飯岡環境政策課長）　低炭素社会は、今や脱炭素社会となっており、低炭素と言っているほうがおかしいのではないかという状況になっているのは私たちもよく承知しておりまして、いろいろな場面で脱炭素というフレーズを使わせていただいております。

現状の基本方針はこのように書いているということで、今、係長から申し上げましたが、私たちも、あと３年も４年もこの形が適正なのかどうかはしっかり考えさせていただきます。いろいろなところが変わっていくものですから、都度都度というのはなかなか難しいのですが、少なくとも低炭素、脱炭素は大事なフレーズですので、預からせてください。今後、しかるべきタイミングの中で、改正も含めて考えてみたいと思います。

○大沼会長　もし軽微な文言の修正ができるようならば、ぜひお願いしたいと思います。

ほかにございませんか。

○松田委員　３点あります。

まず最初に、「（３）環境教育・環境学習の場と機会の充実」についてです。

１０ページのウのコンテストのところで、コンテストの経緯がどういう経緯だったかは分かっていないのですけれども、小学校の部、中学校の部とあるので、もしかしたら応募窓口が学校だったのかなと思ったのですが、そこに学校外団体の部が入っているので、これが当初からあったのか、後から入ったのか、分からないのですが、名称について、学校外団体でいいのかなと思ったのです。

学校ありきで学校以外みたいな感じがどうしてもしてしまうので、このままのほうが学校ではない団体で応募されているのかが分かるよということであればいいのですけれども、何か違う名称はないのかなと思いました。悪いというより、ちょっと違和感があるなという気がしました。学校中心のコンテストなのだな、それ以外はプラスアルファなのかなという感覚を私は持ってしまいました。

２点目は、１２ページの「（４）普及啓発のための情報の発信・広報と行動の後押し」についてです。

アのところでホームページで情報提供を行っているとありまして、そのほかにＳＮＳ等も使ってとありますが、ホームページのアクセス件数を見るとだんだん下がってきている

ということです。コロナ禍があったので、もしかしたらコロナ禍中のアクセス数が多かったという傾向があったのかもしれませんけれども、今年度は１１月末現在で６万３，０００件なので、恐らく、最終的には７万件ちょっとぐらいかと思います。

だんだん下がっているというのは、恐らく、情報を取りに行くという行為がそろそろあまり一般的ではないのかなという気がしています。もちろん、取りに行く情報先があるのは全然オーケーなのですけれども、戦略的に見ると、今はレコメンド機能があるので、自分のところに流れてくるというような、ＴｉｋＴｏｋなりの動画サイトもありますので、そちらでやると情報が届きやすくなったり、もしくは、必要とされているところに届いたりということがあると思ったので、その辺はどういう戦略を構想されているのか、お伺いしたいです。

それから、３点目が同じく（４）のウの環境広場さっぽろのところについてです。

私は今年度も出展したのですけれども、率直に人が少ないなと思ったのです。あのドームは広いので、そう感じるのかなと思ったのですけれども、令和元年度に参加したときはもっとたくさん人がいて、たくさんイベントも行われて結構にぎやかだったのです。それが、今年参加してみると、ちょっと寂しいなという気がしました。

去年は４月に行われて、別のイベントとの合体だったので結構人数が多かったですけれども、今年は１万８，０００人ということで、倍ぐらい来てもいいのかなと思ったのです。広報もあったのかもしれませんし、日程もあったと思ったのです。８月下旬だったので、夏休みの終わりのところだったのです。去年かおととしか、前までは８月の上旬の８日とか、その辺で行われていた気がしたのですけれども、それはたまたまだったかもしれませんが、日程のところもあるのかなという気がしました。

何とかこれをうまく生かしていければ、小・中学生もそうでしょうし、大人たちの環境学習、環境教育の面でも啓発活動になるのかなと思いましたので、何かいい方法はないのかなと考えていたところです。

答えはありませんけれども、率直な感想として述べさせていただきました。

○松田委員　事務局から、今の３点について、それぞれお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　まず、コンテストの件について、私から説明させていただきます。

記憶があやふやで申し訳ないのですけれども、たしか、一番最初にやったときは学校外団体の部はなかったはずで、小学校の部と中学校の部だけだったような気がします。小学校の部の中に児童会館だとかがちょこちょこと入っていた記憶がございます。

そういった団体の参加が増えてきたということで、学校外団体の部を新たに設け、今の体制で進んでいるという経緯があったという記憶がございます。

私も、この名前がいいのか悪いのかは判断しかねるところでございますけれども、最近の参加団体の様子などを見て一度考えてみたいなと思っております。

○環境プラザ（上杉係長）　環境プラザのホームページについて説明させていただきます。

確かに件数が減ってきているなと捉えてはいたのですけれども、対して、特にインスタグラムに関しては、昨年頃から、あるインフルエンサーの方が環境プラザにキッズスペースがあって屋内で天候に左右されずに小さい子と過ごせるよと広報してくださっていて、そこから大分需要が増えているといいますか、利用が伸びていまして、件数と反比例する形で幼児親子の利用が出てきているのです。ですから、一概に件数が減っていることによって広報や露出が減っているということではないと考えています。

私がホームページの仕様をちゃんと押さえていないので、何とも言えない部分はあるのですけれども、フェイスブック、インスタグラムの閲覧数とホームページの閲覧数がきちんと反映されているのか、確認をしたいと思ってるのですけれども、対して、ホームページから何が確認できるかというと、講師派遣や貸出し教材、見学受付なども該当してくるのですが、そこら辺のリピーターが大分多くなってきているというところで、新規層の獲得が課題なのではないかと思っています。

そういったところでアクティビティーを新しくしてみたり、講師派遣の使い道を分かりやすくリーチしていく必要があると考えていまして、そこを伸ばしていくと、ホームページのアクセス件数は増えていくかなと考えています。

○事務局（飯岡環境政策課長）　３点目にお答えさせていただきます。

環境広場さっぽろ２０２４の件でございます。

まず、大変貴重なご意見をありがとうございます。

今回は８月２４日、２５日の２日間でやらせていただきましたが、裏の話を申し上げると、会場を借りる日にちに制限がかなりございました。例えば、コンサートやプロの野球やサッカーの試合という中で、今回も８月２４日、２５日にお借りすることができました。

８月２４日、２５日は、今回、夏休みが１週間延びたということで、一番最後の休みの土・日に開催させていただいたということで、正直、私たちも、大和ハウスプレミストドームとの調整の中で、この日を選ばざるを得なかった部分もありました。その中でも、子どもたちにたくさん来ていただきたいという思いで、エコチルを出している株式会社アドバコムさんと一緒にかなり多くのＰＲをさせてもらったのですが、このような人数でした。

おっしゃるとおり、もっと集まるにこしたことはないですし、私たちももっと目指していきたいなと思いますので、まずはＰＲをもっと頑張ってまいりたいと思います。

一方で、毎度、ご来場をいただいたお客様にアンケートを取っているのですが、あまり混むと自分がやりたいものがなかなかできなかったり、北ガス様にも大変お世話になっていて、大きなブースを設けていただいているのですが、１時間待ち、２時間待ち、３時間待ちだったようです。

しかし、今回は、閑散とまではいかなかったと思っているのですが、適度な待ち時間でできたということで、９０％以上の方が満足した、そして、来年もまた来たいというご意見もいただきました。

少なければいいわけではないので、多いほうを目指してまいりたいと思いますが、そう

いう側面もあったということをご報告も含めて申し上げさせていただければと思います。
○大沼会長　松田委員、今の３点についていかがですか。
○松田委員　今の環境広場の件も広報活動をということがあったのですが、そのためにはもしかしたら広報戦略を考えていただくことが必要になってくると、先ほどの２点目のホームページ等のところでお話をした情報の届け方についても今後は考えていく必要があると思いました。
　特に、ホームページのアクセス件数は載っているのだけれども、インスタやフェイスブックの回転数も今後必要になってくるかもしれませんし、もしくは、ＴｉｋＴｏｋやストーリーでも結構ですけれども、それによってどれぐらいの人が影響を受けたのかという効果も測れるようにしていくといいという気がしました。
　別の委員会でも話をしたのですけれども、そういうことをやると人手が足りないとか、時間がないとか、お金がみたいなところがあるのですけれども、そこはうまく何かしらほかの人材と連携しながらということもあると思っていました。
　例えば、私は大学に今在籍しているのですが、学生なんかは割とその辺をすらすらやっていったりしています。うちの学生は、プロジェクトで石狩市さんと連携をして石狩市の社会教育の事業を展開する際のフェイスブックのアカウントを設定してお年寄りと一緒にフェイスブック運営をしたりしているのです。
　ですから、先ほど出てきましたけれども、学生や高校生のユース世代と連携をすることで、ユース世代はそこで学びが得られますし、つながりや人脈をそこで確保できるということも踏まえると、サービスラーニングとして非常に大事なチャンスかと思うので、そのあたりは今後もしかしたら必要になってくるのかなという気がしました。
○大沼会長　フェイスブック、インスタなどのカウントの方法については、今後ご検討をいただければと思います。
　ほかにございませんか。
○坂本委員　先ほど話題になっていたコンテストの件です。
　私は、今シーズンは残念ながら審査員で伺えなかったのですけれども、長年関わってきていて、先ほど話題になった審査項目については私も以前から考えていたので、発言したいと思います。
　審査といっても、年齢も内容も全く違うので、当然、公平に並べて優劣をつけるのは不可能だという前提ですが、それでも子どもたちは優秀だと表彰されることにとても喜びを感じるし、励みになるので、それ自体はいいことだと思うのですけれども、あまり勝負にこだわるような審査になるのはよくないと思っていました。
　そういう点では、大沼会長がおっしゃったように、プレゼンテーションの優劣に評価が引っ張られるようなことはないほうがいいと思います。
　私たちのところは、社会教育で主に高校生や大学生が集まりますけれども、彼らぐらいになるとプレゼンテーションは本当に上手なので、下手をしたら、中身を全く理解してい

なくても大人より上手に発表したりします。そういう技術が大事な場面もあるかもしれませんが、ここでは子どもたちが活動の意義をよく理解しているか、主体的に関わっているか、そして、継続して活動しているか、周辺に広がるかが一番大切だと思います。ですから、ＡとＢの項目は適切ではないかと思います。

また、私は、環境省が主催している同様の全国のコンテストの審査員も何年かしておりまして、そこでも話題になっていたのですが、環境保全の効果の優劣もまた難しくて、脱炭素や温暖化対策は割と数字に表しやすくて高得点になるのですが、北海道から出てくる発表は割と地方が多かったこともあって、湿地の保全だったり、森林の保全だったり、生物多様性に関するものが多かったりして、環境省的にはこれは脱炭素ではないみたいな評価をされていたのがとても残念だったと思っています。

最初のほうに有坂委員もおっしゃっていましたけれども、環境教育は温暖化対策教育ではないと思います。私たちも２０年前は環境教育と言っていて、それがＥＳＤとかＳＤＧｓ教育というふうに言い方が変わるようになってきました。最近では、ＳＤＧｓも、ウェルビーイング、幸福や福祉などの人間の幸福、個人の幸せを切り口にした評価みたいなこともしていて、必ずしもＧＤＰやＣＯ２発生量という評価軸だけで持続可能な社会というのは考えられないのではないかと思います。

うちでは今、企業向けの研修のプログラムをつくっているのですけれども、その指導をしてくださっているコンサルタントの方がウェルビーイングＳＤＧｓ研修というものをおやりになっていて、気候変動の話は、正直、企業人も、恐らく子どもたちも、なかなか自分のことだとはっきり認識しづらいのだと思うのですけれど、ウェルビーイングみたいな自分の幸せ、あるいは、家族の幸せ、社員のモチベーションみたいなところから考えると自分事になり、責任も感じるということで、最近は企業研修の中でもそういう切り口を導入しているのだそうです。

ですから、小学校、中学校の学校プログラムの中でやるのであれば、むしろ子どもの目を通したウェルビーイングみたいなことも取り入れられたらよいのではないかなと感じました。

意見でした。

○大沼会長　大きいところからご意見をいただけましたし、どれもすごく大事なコンセプトでした。

○中村委員　１０ページのウのさっぽろこども環境コンテスト２０２４の感想と意見を述べさせていただきます。１５時３０分頃からの見学となりまして、発表は残念ながらお聞きすることはできませんでしたが、ステージイベントと表彰式を鑑賞いたしました。

表彰式では、学校名を呼ばれ、飛び上がって喜ぶ姿、子どもたちの一生懸命に取り組む姿勢にエネルギーをいただきました。

パネルの環境活動ノートの紹介コーナーでは写真と文章で大変分かりやすく掲示され、ご意見欄が設けられていました。ご意見欄では付箋に感想を記入して貼れるようになって

おり、「素晴らしい取組だと思います」「絶滅危惧種の保護活動までできるとさらに良いです」「ファンになりました」などが書かれていました。来場者からフィードバックを得ることができ、意欲向上につながる大変素敵なコーナーだと感じました。

来場者アンケートに「コンテストに加えてほしいプログラムはありますか？」という項目がございましたが、札幌市や企業の取組の紹介がありますと、活動の輪がさらに広がるのではないかと思います。

○大沼会長　来てくださって、ありがとうございました。

パネルもいろいろなコメントがあって、もうちょっと工夫の仕方はあると思いますが、初の試みとしてはかなりよかったと思います。

○先名委員　同じく、さっぽろこども環境コンテストに私も来賓参加させていただきました。最後の表彰のところまで参加させていただいたのですけれども、一番感じたのは子どもたちの情熱です。その情熱を持ち続けさせるのは、学校の先生であり、あるいは、児童会館の先生であり、環境塾系の先生だったりすると思います。心の部分をものすごく現場で体感できたのではと感じました。

情熱を持ち続けないと継続もできないというところもありますが、バックヤードで学校の先生と「６分間でちゃんと自分たちの思いを発表できたね」と喜び合っている姿を見たり、ほかの生徒の発表を真剣に真っすぐ見ている姿を見ると、こういう刺激が必要なのだなとも思いました。

ホールでのパネルの発表も、付箋を書いたコメントを見て、自分たちのところにコメントがあって喜んでいる姿を見受けられました。それをしっかりと読んで自分にフィードバックしているなと感じました。

もし可能であればの話ですけれども、さっぽろこども環境コンテストでもきれいに印刷してパネルにするのであれば、その隣に環境教育・子どもワークショップでやったような手書きで可視化された絵とキーワードのコメントでまとめられたグラフィックレコーディングを横につけてあげられると、よりフィードバックがしやすいし、発表に参加できなかった人もそれを見ると空気感を感じられるかなと思います。

なおかつ、それをさらに利用するのであれば、参加者の応援に来た子どもたちが自分が共感できた、自分もぜひそれをやってみたい、学びたいというものがあれば、例えば、そこにシールを貼ってもらったりすると、シールの量で参加した人との感じ方が客観的に見られるかなと感じました。

私は親目線で見てしまうので、あの活動の姿を見て、親も共に学んでいかなければと反省して帰ってきた次第であります。

○大沼会長　皆様にお越しいただき、本当にありがたいですし、こうやって応援していただけることも本当に心強いなと思います。

２点のご提案をいただきまして、一つはグラフィックレコーダーができるかって話で、シールを貼るのはできそうだと思いますが、事務局から、改善ができそうなことがあれば

お願いします。
○事務局（谷内環境教育担当係長）　グラフィックレコーダーについては、貼るスペースがあればできるのではないかなと思います。消防法関係の規定などにより掲示スペースの制約もありますので、どこまでできるかはあるのですけれども、検討していきたいと思います。

シールについては来年からでもできるのではないかなと思っております。この取組自体が初めてということで、どういう結果になるのか、半ばびくびくしながら行った部分もありましたので、今回、よかった面や課題も含め、来年度、よりよいものにしていきたいと思っております。

ほかにございませんか。
○山本委員　（３）のアの１０ページの「令和５年度末に」からの３行の意図が読めなかったので、ご質問です。

いろいろな層が環境プラザを利用されると思いますが、受入れ数の増加を目指した広報活動を予定しているということなので、見学受入れ数を増やしていかなければいけないという課題があるのでしょうか。その中で脱炭素に関する見学受入れ数に焦点を当てていらっしゃるのでしょうか。

環境プラザはいろいろ工夫されてやられていると思いますが、課題があるのであれば、せっかくなのでここで意見を伺う場となれば良いと思いますし、意図を確認させていただきたいです。
○大沼会長　環境プラザからお願いいたします。
○環境プラザ(上杉係長)　脱炭素のアクティビティーの開発に関してなのですけれども、理由としてはいろいろあります。

まずは、新規アクティビティーの開発がしばらくなかったので、環境教育や環境保全に関するトピックが年々変わってきている中で新しいものがなかったということと見学ツアーも年々伸び悩んできているというところを考えたときに新しいものを入れたいというところがあって、エゾリンクさんにご協力をいただきましてアクティビティーを開発してまいりました。アイデアをいただいて、あとは開発に向けてというところでして、今はデバックの手前のところまでの作業が進んでおりますが、対象は、どういったところに向けてこれをやったらいいのかなと実は思っている部分があります。

脱炭素の内容なのですけれども、簡単に言ってしまうと、自分が炭素に置き換わって考えて、すごろく形式でマップの中を移動していくのですけれども、マップの中を移動していくときに、うまく係数が考えられていて、移動するたびに炭素を運ぶのです。土や空気、森のフィールドを移動するごとに炭素を一緒に運んでいくような流れになっているのですけれども、化石燃料を使っている社会での動きと使っていない社会での動きで、どれだけ炭素の量が自然界に増えるのか、変わらないのかというのを実際に疑似体験し、炭素の動きを体験する内容のものを今考えています。

課題としては、学校で子どもたちがどこまで炭素の話をされているのかなというところによっては、どういった内容でそのアクティビティーを提供していけるのかなというところを考えていました。

といいますのも、見学に来られる方々の対象は小学生が中心なのです。小学校もあれば児童会館もあり、今年多かったのは特別支援学級のお子さんとかも来ていらっしゃいました。そういった中で、割と最近のトレンドの脱炭素を取り上げようと思ったときに、炭素とはまず何かというところになるかなと思ったのです。

説明の中でも易しく伝えられるように工夫はしていこうと思うのですけれども、どれぐらいのレベルが子どもたちには分かりやすいのか、学校の授業での取り上げ方はどういうふうになっているのかというところをこれから見ていかなければいけないなと考えております。

○山本委員　今の課題について、先生方にアドバイスをいただけたら良いかと思いました。

○大沼会長　要するに、環境プラザの見学者がアプリだかゲームだかを使って楽しめる何らかのアクティビティーなのでしょうか。

○環境プラザ（上杉係長）　アクティビティーは基本的にアプリではなく、イラストやちょっとした道具を使ったものです。

○大沼会長　そこのすごろくですね。

○環境プラザ（上杉係長）　簡単に言うとそうです。

○大沼会長　ほかにございませんか。

○松田委員　１個前のグラフィックレコーディングの件でお話ししたいと思います。

うちの大学ではファシリテーショングラフィック入門という科目があって、学生がそれを学んでいるのです。となると、学生が得た経験を生かす場が必要だと思うのですけれども、なかなかそこまでつながっていなかったので、これまでサービスラーニングの一環として学生たちに声をかけてこういうところでやってみないかという話をしていたのですけれども、もしそういったところでやらせていただけるのであれば、協働的に学びが進められたりするのでいいと思っていました。

長谷川さんや牧原さんといったプロの方にやってもらうほうがいいと思うのですけれども、質的にはなかなか難しいかもしれないけれども、今後の北海道の中でそういった技術やスキルを持っている方を育てる意味では有効なのかな、大学側からしたらありがたいと思って発言させてもらいました。

○大沼会長　ぜひ、大学との連携や学生の育成も含め、来年度ご検討いただければと思います。

○先名委員　松田委員の今のコメントに加えて、グラフィックレコーディングは同時通訳のように描いていくスタイルもあるし、もしくは、あらかじめこれだけ立派なパネルとしてプリントしてありますので、その資料を事前に大学側でお預かりし、それをグラフィックレコーディングにまとめたものを提出するという方法も可能でして、いろいろなスタイ

ルがあると思いますので、ぜひその辺は検討していただければと思います。
○大沼会長　具体的にやるときには、松田委員と先名委員のお知恵を借りながら計画を進めていただければと思います。貴重なご意見、ご提案とご協力をありがとうございます。きっとお願いが行くと思いますので、よろしくお願いします。
　ほかにございませんか。
○有坂委員　全体を通して、毎回感じることですが、環境教育、環境学習というのは、小学生、中学生だけが対象ではなく、大人も含めてだと思うのです。しかし、ここで議論されている、あるいは、取り組まれている内容を見ると、どうしても小・中学生にターゲットを絞っていると思うのです。
　多分、それでは駄目で、いろいろな方からコメントがあったように、大人がまずやらなければいけないですし、子どもは大人を見ていると思いますので、小・中学生だけではなく、大人に対する取組をやっていかなければいけないのではないかと思うのです。
　私は、札幌市のほかの審議会委員もさせていただいているのですが、ボランティアが減っているという課題があって、それは大人の問題です。特に高齢者の方は何らかの地域活動、それこそ環境保全の活動をされている方も多いので、そういった方たちの取組をもうちょっとサポートするような、あるいは、ボランティアが増えていくようなことがあってもいいと思います。
　また、企業もいろいろな取組をされていて、北海道ガスさんももちろんそうだと思いますけれども、もう少し企業の取組を周知するようなことがあっていいと思うのです。
　環境広場さっぽろに出展される企業もいらっしゃいますけれども、先ほどから何回も出ているさっぽろこども環境コンテストの中で、中村委員もおっしゃっていたように、企業の取組の発表があればいいのではないかと思います。
　生物多様性に関して企業が宣言するという札幌市の取組がありまして、宣言しているのは百六十社ほどあるようですが、正直、何をしているのか分からないですよね。企業の取り組みと子どもたちの取り組みとをセットにしてコンテストなどをやるとより効果的だと思いますし、その場に子どもがいるということで発表される企業も身が引き締まると思うのです。
　西村さんが最初に挨拶されたように、コンテストで子どもたちが一生懸命やっているのを目の当たりにするとやらなければなと大人は思うと思いますし、大人はこんなことを会社でやっているのだと知ったら、子どもも期待感を持つでしょうし、自分の将来の姿というか、キャリア形成の意味でも、こういう企業で働きたいなということにもつながると思うのです。
　ＳＤＧｓが出てきて以降、私はこれは問題だと思っているのですけれども、ユースとか何とかと分けて、世代間の接点がほとんどない感じがしています。
　もちろん、ユースだけを集めてとか、企業だけを集めてとか、そのほうが安心感があったり、分かりやすい、参加しやすい面があるとは思います。ですが、松田委員もおっしゃ

っていましたように、小・中・高生と社会人の間にいる大学生で、例えば藤女子の学生は本当にいろいろなところで活動されています。私が関わっている活動にも協力してくれたことがあります。藤女子大の学生だけではなく、大学生には何かをやってみたいと思っている人たちがいっぱいいますので、もうちょっとつなぐということをやれないのかなとすごく思います。

子どもだけの話で終わらせないでほしいのです。大事ですけれども、子どもは大人の背中を見ていると思うので、先ほどのエコライフレポートではないですけれども、自分たちだけさせられているみたいなことではなく、そこは地域全体で盛り上げていく話だと思うので、考えていただけるとよいかなと思います。

○大沼会長　とても大事なことですし、そろりそろりとはいろいろなことをやろうとしていると思うのですが、まだまだ足りていないということだと思いますので、大人向けに何かをするということと、大人や子ども、高校生、ユースがばらばらではなく、企業など、全部をつなぐことは、環境政策課でできることも何かありそうだし、環境局を挙げて、あるいは、もうちょっといろいろなところで私も一緒に何かできたらなと思います。

最後になってしまったのですが、石澤委員、お願いいたします。

○石澤副会長　今の有坂委員からのお話は、本当に大切なことだと私も思います。また、その一歩一歩を皆様のいろいろな視点で埋めていっているのだろうなと感じました。

今日は、つなぐとか、大学生の活用とか、それから、小・中学校だけではなく大人まで環境教育をどう行っていくかということで、私もすごく学ばせていただいたなと思っています。

ここに３年間出席させていただいて、ずっと小学生に配付されている環境副教材が今後さらなる活用のために、どうしていくのかべきなのかという話を、ICT活用も含め、いろいろな面からされていただいておりましたが、令和８年度までに電子化になるということも成果としてお伝えいただけました。また、電子化されたとき教師側がどのように活用していくかという話題になりましたが、それも多分、教育委員会と連携し、教育課程をどうつくり出していくかという手引等もありますので、そちらに記載しながら、工夫して乗り越えていけるのかなと思いました。

私は、初めて環境コンテストに出させていただき、そして、審査員もさせていただきました。皆様がおっしゃるとおり、中学生、高校生も含め、発表した子どもたちのとても熱い思いが会場にいるだけで伝わってきまして、これを審査するのはすごい重責だなと思った次第です。

それと同時に、１２年間も近くの河川をずっと調査する部活動をしている学校があったり、また、地域の方が中心となって小中高の地域住民の皆さんとそこにある環境について調査するだけではなく、自然体験をさせている団体もあったりと、いろいろなところで環境を考えている方がいらっしゃるのだなということもひしひしと実感いたしました。

そのような中で、小学校の発表は、ほぼ学校の学習の発表だったと思います。それは、

総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な学習の中で環境教育に取り組んでいるからだなと思って見ていたのですが、どの発表にも共通点がありました。そこには、環境プラザや企業等が講師を派遣してくださる出前授業のように、必ず子どもたちが環境に思い馳せたり調べてみたくなったりするような、実感を伴うようなスタートがありました。

例えば、富良野に行ったという方がいました。多分、修学旅行を富良野にしたのだと思うのですが、これは教育委員会が作成した倉本聰さんが出演されているビデオの影響でしょうし、この会議で示してくださるいろいろな視点で環境教育を行っていることが、私の中でつながりました。こういうことは、数字にはならないですけれども、間違いなく環境教育として充実させるための取組になっているのだなということが、先日のコンテストと今日のお話、それから、こちらの資料を拝見させていただいて私の中ではつながった気がしました。

今日、とても新たな視点で、ＩＴ系のいろいろな活用やもっと大学生を活用し、それにご協力しますというような大変ありがたいお話もあったので、また新たな展開に進んでいけるのではないかと感じました。

今日は、いろいろなことが私の中でつながり、勉強させていただきました。ありがとうございました。

○大沼会長　非常にすばらしいまとめをありがとうございます。

これで議事を終わらせていただきたいと思います。

時間が大分過ぎて、いつも司会がうまくなくて申し訳ありませんが、本当に活発かつ建設的で温かいご意見をいろいろとありがとうございました。

それでは、マイクを事務局に戻したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育担当係長）　締めの前に、先ほどの欠委員よりお話がありました基本方針の低酸素社会を脱炭素社会にするというところだったのですけれども、実は、基本方針は事務局が勝手につくっているものではなく、推進委員会の皆さんのご意見をいただきながらつくっているものなので、欠委員以外の皆様の意思も確認いたしたく念のための確認ですが、この部分については、「低」を「脱」にするだけではなく、本文にも関連する部分があると思いますので、他にも変わる可能性がある箇所をこちらで拾った上で皆さんに案としてご提示させていただき、問題がなければその内容で直す方向で検討したいと考えていますが、皆さん、ご異議はございませんでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○事務局（谷内環境教育担当係長）　それでは、後日、具体案を提案させていただきますので、よろしくお願いします。

○大沼会長　議事の「その他」で松田委員から１点あるということですので、よろしくお願いいたします。

○松田委員　時間が延びてしまって申し訳ありません。

以前にもご紹介させていただいたのですけれども、私は一般社団法人日本環境教育学会

の代議員をしているのですが、そちらで毎年２月に北海道支部の大会を行っています。北海道自然体験活動推進協議会えぞＣＯＮＥというところと合同で、毎年、フォーラム等を開催しております。今年度も、来年２月２２日、２３日の２日間で合同フォーラム等を行わせていただきます。

２日目は環境プラザを会場に行わせていただきますが、今年は「北海道の環境教育のこれまでとこれから」というテーマでフォーラム、ワークショップや講演を実施いたしますので、ぜひご参加いただけるとありがたいなと思います。

こちらは、環境プラザさんも共催ですし、山本委員の北海道環境財団も共催で、有坂さんのところのＲＣＥさんには協力ということでやっておりますので、ぜひお願いしたいと思います。

ここからはお願いです。

１日目の２２日は土曜日ですが、この日は研究発表と実践発表になっています。この学会については､研究ばかりではなく､実践のほうも結構たくさんの参加者がおられますし、自然活動や一般的な社会教育的なところで環境教育されている方、または、大学生、一般教員の方々も多く発表されておられますので、ぜひ、実践報告、実践発表の報告をいただけると非常にありがたいと思っています。

毎年、学校教員の方々の発表が減っているので、もしよろしければ学校の先生方の活動や授業の内容をご報告いただけると幸いです。そして、大学生がこの頃は増えていますので、割と垣根が低いというか、誰でも発表できますので、ぜひ卒業論文でいいものができたから発表したらどうみたいな形でお誘いをいただけると幸いです。

こちらの詳細は、後ほど、事務局の方を通して連絡させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○大沼会長　環境教育学会という学術から実践もということで、ここにいらっしゃる多くの方のご協力もということでした。

それでは、司会を事務局にお返ししたいと思います。よろしくお願いします。

○事務局（飯岡環境政策課長）　それでは、事務局からご連絡させていただきます。

来年度の第１回目の推進委員会は、例年６月頃に実施させていただいていますので、またこの頃を予定しております。またご案内を申し上げますので、どうぞよろしくお願いいたします。

もう一つは、任期の途中ではございますが、琴似中学校の三浦（英）委員が今年度末をもって校長先生としてのご定年をお迎えになられるということでございます。会議へのご出席は本日が最後になります。

三浦（英）委員から、一言、ご挨拶をいただければと存じます。

○三浦（英）委員　役職定年です。３年間、本当にお世話になりました。

中学校の担当としてやらせていただきまして、中学校の数字を見てエコライフレポートの取組がちょっと上がったのかなとか、環境コンテストに参加してよかったのかなと思う

生徒の割合が増えて、ちょっと安心しています。

きっとこれからさらに増えるのかなと思っています。どうしてかというと、学校の課題探究型学習がこれからどんどん進んでくると思いますし、環境について、学校ではいろいろな教育がある中で、環境教育の重要性を子どもたちは本当に感じています。

そのような中で、エコライフレポートの項目に関しても、７番というところがあって、自分で考えた取組にもチャレンジしていこうというところが、これからどんどん子どもたちがいろいろ考えて多様化していくと良いと思っていますので、これからはそこのところにどのような意見などが出てくるのかを注目して見ていただければと思っています。

中学校は来年度から教科書も変わりまして、今、教育課程の手引をつくっております。特に理科に関しては、本物の体験とは何だろうということを意識しながらつくっておりますので、何とか環境のほうにもつながっていければと思っております。

３年間、お世話になりました。ありがとうございました。

〇事務局（飯岡環境政策課長）　三浦委員、本当にありがとうございました。

先ほど申し上げましたとおり、来年度の第１回目の委員会に向けては、また近くなりましたら日程調整をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

こちらからは以上です。

３．閉　　会

〇大沼会長　ありがとうございました。

以上をもちまして、令和６年度第２回札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会を終了いたします。

本当に長い時間にわたり、ありがとうございました。また、時間を超過して申し訳ありませんでした。

本日は、お忙しい中、ご出席をいただき、ありがとうございました。

以　　上